

使用教材：地図帳『新詳高等地図』



地図帳で大阪平野の地形を読み取ろう。

問1 (1) 『新詳高等地図』p.121～122から地形を読み取るために、まず、標高ごとの色分けを確認しよう。

だいたい色～茶色：（ ）m以上
薄い黄色：（ ）m～（ ）m未満
緑色：（ ）m未満

(2) 『新詳高等地図』p.121～122を見て、大阪平野とその周辺地域の地形の概要を記述した以下の文章の（ ）の中で、適当な語を選ぼう。

だいたい色～茶色で塗られた標高が高いところは（山地・平野）であり、緑色で塗られた標高が低いところは（山地・平野）である。薄い黄色で塗られたところは、主として海から離れた（山麓・山頂）に分布するが、緑色に塗られた平野の中に（台地・低地）として分布するものもある。
大阪平野は、淀川の河口付近に広がる平野であり、その西側には（大阪湾・生駒山地）が、東側には（大阪湾・生駒山地）が、それぞれ位置する。

(3) 『新詳高等地図』p.121～122を見て、^{うえまち}上町台地とその周辺地域の地形について記述した以下の文章の（ ）の中で、適当な語を選ぼう。また、に適当な数値または語句を記入しよう。

大阪平野の中央部に位置する上町台地は、（南北・東西）に伸びる台地で、周辺の低地とはmくらいの標高差がある。この上町台地は、その西側に沿って伸びるの活動によって隆起した台地である。

上町台地の東側には、かつては大和川が流れていた。大和川は、現在は東から西へと流下しているが、これは江戸時代に付け替えられたものである。かつては大阪平野の南東部の柏原市から（北西・南西）へと流下しており、天井川となってによる被害が繰り返されていた。それよりも前の2～4世紀には、旧大和川と淀川との合流点のやや上流側にはがあった。

上町台地の西側には、標高0m前後の地域が淀川から枝分かれした流路の間に広がっており、この地域が（扇状地・三角州）であることを示している。江戸時代後期の海岸線よりも沖側の海岸線は直線的であることから、明治時代以降に（人間による埋め立て・河川による土砂の堆積）が進められてきたことが分かる。大阪・関西万博が開催される夢洲もそのようにしてできた陸地の一つであり、江戸時代後期の海岸線よりも、km沖側に位置する。



地図帳でさまざまな施設の分布と地形との関係を調べてみよう。

問2 (1) 『新詳高等地図』p.121～122を見て、次の表の7つの施設の標高と地形を読み取って、表の①と②に○印をつけよう。

施設	① 標高10m以上の施設	② 上町台地にある施設	③ 浸水すると想定されている施設
大阪国際空港（伊丹空港）			
しんおおさか駅			
おおさか駅			
大阪城			
難波宮跡			
四天王寺			
八尾空港			

(2) (1) の表を見て、上町台地にあるものに共通する特徴を考えよう。



ハザードマップでさまざまな施設の分布と地形と水害との関係を調べてみよう。

問3 (1) 国土地理院が運営するWeb地図サービス「重ねるハザードマップ」で大阪平野の洪水による浸水想定区域を見て、上の表の7つの施設の浸水想定を読み取ろう。そして洪水で浸水すると想定されているかどうかを確認し、問2(1)の表の③に○印をつけよう。

(2) 問2(1)の表を見て、同じくらいの標高でも浸水すると想定されているものとそうではないものがあるのはどうしてかを考えよう。

地図帳を活用した「大阪平野の地形と人々の生活」に関するワークシートの活用について

大阪教育大学 教授 山田 周二

本ワークシートのねらい

本ワークシートは、ウォーミングアップで大阪平野の地形の特徴を地図帳から読み取って、ステップアップで地形と施設の立地との関係を地図帳から調べ、ジャンプアップで地形と水害との関係をWeb地図サービスである「重ねるハザードマップ」を使って調べる、という構成になっている。地図から読み取る、という作業が中心であり、地形に関わる読図技能を習得することがねらいである。

段彩図から地形を読み取る(ウォーミングアップ)

『新詳高等地図』p.121～122の地図は、標高ごとの色分けが、他ページの地図とはかなり異なり、標高50m以下の地形がよく分かるように、低標高が細かく色分けされている。このため、最初に色と標高との関係を確認する必要がある。p.121左下のA-B断面図を見ると、大阪平野の中で最も目立つのは上町台地である。段彩図で見ると、この上町台地は、その北端に位置する大阪城付近では、薄い黄色の帯に見えるものの、南に向かうと南東にも薄い黄色の範囲が広がっている。これは、かつて大和川が流れていたためである。

大和川は、江戸時代の1704年までは、大阪平野の南東部から北西に向かって流下して、淀川と合流しており、湖が形成されていたこともあった。かつて湖であった範囲が現在は陸地になっているのは、川が何度も氾濫することで、水とともにあふれた土砂によって湖が埋め立てられたためである。そのような氾濫は人間の生活を脅かすものであったため、西に向かって大阪湾に流れるような河川の付け替え工事が行われた。

大阪湾岸地域は、主に三角州からなるが、この三角州は低地である。低地・台地と三角州・扇状地とは分類基準が異なり、低地・台地は水面からの高さによる分類であるのに対し

て、三角州・扇状地は成因による分類である。このため、同じ地形を三角州とも分類できるし低地とも分類できる。状況に応じて適切な基準による分類が適用されることを理解しておく必要がある。

地形と歴史的建造物との関係を調べる(ステップアップ)

『新詳高等地図』p.121～122の地図には、標高だけではなく、主要な施設等の情報も示されており、地形とそれらの関係を調べることができ、歴史的な建造物は、上町台地に分布することが読み取れる。上町台地の周辺は、p.121～122の地図に湖があったことが示されているように、かつては軟弱な地盤の低湿地であったため、大規模な建造物の建設には不向きな土地であった。このような、かつての環境を地図から読み取れば、大阪城や難波宮跡、四天王寺といった大規模な建造物が上町台地に立地している理由を理解できるであろう。

地形と水害との関係を調べる(ジャンプアップ)

『高等学校 新地理総合』p.53に示されるように、台地の多くは水害からは安全である。このことは、ハザードマップの浸水想定区域を見ると確認することができる。現在、最も簡単に日本全国のハザードマップを見ることができるのは、国土地理院が運営するWeb地図サービスである「重ねるハザードマップ」である。上町台地では浸水が想定されていないのに対して、同じくらいの標高にある大阪国際空港や八尾空港では浸水すると想定されていることから、標高ではなく河川からの標高差が水害にとっては重要であることを理解したい。

右面の解答例はコピーしてご利用ください。



問1 (1)

だいたい色～茶色：（ 50 ）m以上
薄い黄色：（ 10 ）m～（ 50 ）m未満
緑色：（ 10 ）m未満

(2)

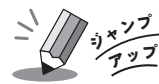
だいたい色～茶色で塗られた標高が高いところは（**山地**）・平野）
緑色で塗られた標高が低いところは（山地・**平野**）
薄い黄色で塗られたところは、主として海から離れた（**山麓**）・山頂）
緑色に塗られた平野の中に（**台地**）・低地）
西側には（**大阪湾**）・生駒山地）
東側には（大阪湾・**生駒山地**）

(3)

大阪平野の中央部に位置する上町台地は、（**南北**）・東西）
周辺の低地とは**20**mくらいの標高差
その西側に沿って伸びる **活断層あるいは上町断層** の活動
かつては大阪平野の南東部の柏原市から（**北西**）・南西）へと流下
天井川となって **河川の氾濫あるいは洪水** による被害
旧大和川と淀川との合流点のやや上流側には **湖** があった
この地域が（扇状地・**三角州**）
明治時代以降に（**人間による埋め立て**）・河川による土砂の堆積）
江戸時代後期の海岸線よりも、**3～4** km沖側に



問2 (1)



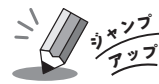
問3 (1)

施設	① 標高10m以上の施設	② 上町台地にある施設	③ 浸水すると想定されている施設
大阪国際空港（伊丹空港）	○		○
しんおおさか駅			○
おおさか駅			○
大阪城	○	○	
難波宮跡	○	○	
四天王寺	○	○	
八尾空港	○		○



問2 (2)

- ・江戸時代以前の施設である。
- ・大きな建物をともなう施設である。



問3 (2)

大阪国際空港も八尾空港も、標高は高いものの上町台地よりも内陸にあるので、川の標高が高く、空港との標高差が小さいので、川が氾濫すると浸水する。